

## 飯島賢二の 『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 462 回 砂時計

2012. 3.4



60 分用の砂時計を購入した。

前から欲しくて、いくつかのデパートを彷徨(さまよ)って見たが、結局ネットで購入した。

届くのがまちどおしい…久々に、嬉しい買い物をしたと感謝している。

『人生は砂時計のようなものだ。砂時計の二つのビンはごく細い首でつながっていて、一度に砂粒ひとつしか通り抜けられない。これが人生の真の姿である』とは、ジェームズ・ゴードン・ギルキーの言葉である。

る。

砂時計、落ちてゆく砂は過去、上にある砂は未来で、中間の細い首が今を現している、それは正に、三際(さんさい:現在、過去、未来)を現しているように思える。

過去と現在、そして未来、時間は砂時計の砂のように、さらさらと、とどまることなく流れ落ちていく。今という時間の中で、自分の行動がどうであったのかという自戒の念を、砂時計の砂の流れが、思い起こせてくれるのだろう。

たとえ多忙きわまる日でも、仕事のいっぱい詰まった時間は、一度にわずかずつ姿を現す。人生はすべてこの通りである。たとえ、その日のうちに取り組む仕事、問題、心の緊張はおびただしくても、みんな必ず一度に一つずつやってくる。

それはあたかも、砂時計の粒のように……

砂時計の砂は、上から下に移動し変化する。

この変化は、結局、少しずつしか起こらない、未来の砂は、過去の砂となるのに、現在という細い首を通るしかない…という形相を表している。

砂時計の首は、まさに未来と過去を繋いでいる「今」であると思えてきた。

どんなに急ごうと思っても、砂は、沢山落とせない。

人生は、確実に、一步一步、歩んでいくしかないということを、何も語らずして砂時計が教えてくれる。

そして、思い出として落ちてしまった一粒の砂を、砂粒の形として拾い出すことはできない。過去というものはやはりやり直しが効かない。

だから砂時計は、「今」という時間をどう生きるかということを、教えてくれている。

砂時計の砂が落ちるのを見ていると、過去から未来へ、刻々と時間が過ぎていくのを、目で見ることができる。だから、時間の貴重さを体感できる。

そう、砂時計の単純、かつ滑稽な形が、時の歩みを教えてくれるのだ。

この砂時計をひっくり返した時、今日もまた、貴重な 1 時間をいかに過ごしたか、自分に問いかけてくれる。万人に平等に与えられた時間、その大切な 60 分だった。

だから、今日から…我社のすべての会議は、「原則、この砂が落ちるまで」、そう決定することにした。